

# 今後の予定

## 写仏講座

令和五年一月十九日(木)

令和五年二月十日(金)

令和五年三月十日(金)

いずれも十三時開始・十四時三十分終了

真言宗豊山派宗務所にて

※以後の開催予定日につきましては、随時Webサイト・Facebookにて告知いたします。

豊山仏青Webサイト 写仏ページ  
<https://www.bussei.gr.jp/tracing>



## 全真言宗青年連盟

### 東日本大震災十三回忌事業

#### 福島を想い 福島から学ぶ

〜寺院を護り、伝えるために〜

令和五年三月二日(木)

十時開始・十六時三十分終了

真言宗豊山派大本山護国寺にて

#### 申込フォーム

<https://forms.gle/cdqvVZkgdUyF2a>

申込締切日 令和五年二月十二日(土)

※寺族の方もご参加いただけます。



## 編集後記

前回の「豊友」百七十三号発刊から百七十四号の編集(十二月初旬現在)に至るまで、豊山派仏教青年会の主だった活動は、大覚寺様における全青連結集への参加に留まりました。未だにコロナ禍が収まらぬ中、開催日の悪天候にも関わらず会場設営と手厚い歓迎をして下さった真言宗大覚寺派の皆様は、心より御礼を申し上げます。

さて、令和四年もあつという間に過ぎ去ろうとしています。振り返ってみると、今年には日本各地が相次いで豪雨による災害に見舞われておりました。そのため今回は豊山派仏教青年会が災害協定を結んでいる団体・日本笑顔プロジェクト様が携わったボランティア活動のお話を賜りました。「もしお大師様が、災害大国になった現代の日本に居たらどうする？」その問い掛けが、特に強く印象に残っております。

広報次長 木村修廣

# 豊友

## 第174号

<https://bussei.gr.jp/>

### Buzanbussei Buyu

題字 浅井侃雄 祝下

全真言宗青年連盟第四十二回結集大覚寺大会

一般財団法人日本笑顔プロジェクト様インタビュー



## 豊山仏青Webサイト

写仏講座・千響チャリティー演奏は

豊山仏青

検索



## Facebook

[www.facebook.com/buzanbussei/](http://www.facebook.com/buzanbussei/)



豊友お問い合わせ先

[webussei@gmail.com](mailto:webussei@gmail.com)

## 豊友 第174号

令和4年12月20日発行

発行人 木村 修明

発行所 〒112-0012 東京都文京区大塚5丁目40番8号  
真言宗豊山派宗務総合庁舎内 真言宗豊山派仏教青年会

デザイン・印刷 株式会社ディー・エイ・ティ・コーポレーション



# 全真言宗青年連盟第四十二回結集 大覚寺大会に参加して

茨城四号仏教青年会 成光寺

井上 煌悠



彼岸を過ぎ、秋が一層深まるのを肌身で感じる十月七日、生憎の雨天の中向かった京都の嵯峨野は、市内中心部よりさらに凛とした秋の空気で私たちを迎えてくれました。このたび、大覚寺派青年教師会様が担当される第四十二回結集に参加させていただき、たくさんの貴重な経験を大覚寺にて頂戴してまいりましたこと、駄文ながらご報告させていただきます。

私も個人的にこれまで何度か全青連結集に参加させていただきましたが、今回この清らかな嵯峨天皇ゆかりの道場でたくさんの方と過ごした時間は、屋根と庭園に降り頻る雨音と相俟って今も深く心に残っています。この時間をそうさせたのは、コロナ禍を経た主催者様方による並々ならぬ創意とご尽力、その静かなる熱意を滞在時随所に感じられたからかもしれません。また今回掲げられたテーマ、「瀉瓶く信修すれば忽ちに証す」が改めて問いかける、激動の令和の時代を担う真言僧としての現在進行形の行動指針について、誰もが考えざるを得なかったからだと思います。責任を持って授かった法の灯りは絶やすこと

となく次へ伝えていく義務があり、発菩提心の先に仏果を求め続けなければならぬと実行委員長様のお言葉にもありました。真言宗大覚寺派教務部長・竹原善生僧正より頂戴したご講演においても、唐より帰国後の宗祖弘法大師に多大な影響を与えられた嵯峨天皇様のご尊意、今と同様病魔蔓延る時代にお残しになられたリーダーとしてのお姿、また、まさに瀉瓶という言葉の表す、教えを伝えていくことの重要性などをお話しされておりました。

続いて午後には宮大工・小川三夫氏が壇上に立たれ、まさしく今回のテーマを体現するような、それでいてとても親身な視点で「継承」ということをお話してくださいました。時に笑いを含みながら小川氏が紡ぐ、大工を志されたご自分の若き日のシーンから今現在のお弟子さんたちのご活躍についてまでの一連のドラマは、まさに水が染み入るがごとく私たち聴衆の心に潤いをもたらし、近い将来に次世代の模範となっていく青年僧としての自覚を問いかけてくださるものでした。また、華道嵯峨御流の総司所である大覚寺様において拝見させていただいた記念插花は、嵯峨天皇様の御心と今日の秋の清らかな空気を静かに表現されていて、誰もが心を研ぎ澄ませました。

この結集開催にあたり、大覚寺派青年教師会の実行委員会の皆様、全真言連盟関係者各位、また豊山派仏教青年会の皆様にお世話になりましたこと、一参加者として改めて感謝申し上げます。ここで頂いたことを自分の日々の指針に加え、さらなる研鑽に繋げて行きたいと思っております。





# 災害時ボランティアに関するインタビュー

訊き手：広報次長 木村修廣

2019年より豊山派仏教青年会は、防災・減災の実施及び被災地における復旧・復興活動を目的とする団体「一般財団法人日本笑顔プロジェクト様（以下、笑顔P様）」と災害協定を結んでおります。

笑顔P様は近年、大規模水害等の復興活動に必要な不可欠なパワーショベル等の小型重機を用いた支援・その運転資格を取得するための講習会開催に力を注がれております。近年、日本列島は絶え間なく様々な災害に見舞われています。特に今年は大規模な水害が相次いでおり、新潟県や静岡県などが甚大な被害を受け、笑顔P様もその救援活動に尽力しております。

今回は笑顔P代表理事を務める豊山派仏教青年会元会長・林映寿氏、そして実際に被災地を訪れ支援活動に参加した豊山派仏教青年会副会長・白井宥成氏に、災害時ボランティアに関するお話を伺いました。

## 笑顔Pのはじまりについて

林：笑顔Pは東日本大震災をきっかけに、2011年に立ち上げた団体です。重機関係の活動を行うようになったのは、2019年の台風19号の際、重機ボランティアの方々の存在を知ったのがきっかけでした。

重機ボランティアとは、被災地にショベルカーを持参し水害で堆積した漂流物や土砂を撤去する民間のボランティアです。行政から委託を受けた地元建設業者さんは、公共的な道路や河川だけでしか作業ができず、個人宅や私有地での復旧作業は個人の責任で作業を進めていかなってはなりません。スコッ

プで土砂を取り除くには限界があります。昨今のコロナ禍で、一般のボランティアさんも集まりにくいいため、特に重機ボランティアの必要性が高まっています。世の中の9割程の人は、今でもこの存在を知らないのではないのでしょうか？

日本にはそういった特殊技術を持つ団体が約10組程しかありませんでした。そして団体の人達は高齢の方が多い上に平時は仕事で忙しいため、後継者の育成までは行えていないようでした。「重機ボランティアの今後はどう

なる？」と考えた時、直近の災害救援も必要ですが、未来を見据えて人を育てることも大事だと思ったのです。

この台風により、私の地元である長野県小布施町も被災地になりました。被災した人間がやられなかったで終わるのか、「その経験があったから強くなった」と言えるのか…。こうした思いを胸に、自助のレベルを上げる取り組みに至りました。

また、私は考えました。もしお大師様が、災害大国になった現代の日本に居たらどうする？橋もダムも造ってきたお大師様を思えば、きつと自ら重機に乗って活動をされているだろうと。お大師様は生活に直結するものを地元の人々と作り上げてきた。公共事業はもちろん、教育も同じです。その教えを受け継ぐ真言宗の僧侶であれば、それはやらなければならぬことかもしれない：と、私自身は考えています。直接人を救うところまではいかないかもしれませんが、やってみなければわかりません。



## 直近の静岡での活動

林：現在（10月下旬）では、9月下旬に発生した台風15号の記録的豪雨により被災した静岡の復興活動

に注力しています。この被害は新潟の豪雨被害・復興活動からさほど間を置かぬうちに発生したため、非常に驚きました。2022年は10月の時点で起きた災害だけでも福島、東北豪雨、新潟、静岡と4つもあります。団体設立当初は5、10年に一度動けば良い、と思っていました。笑顔Pでは他団体と連合を組み、一般家屋に堆積した泥のかき出し・運搬を行っています。基本的に泥を置く仮置場は、被害状況を全て把握した状態で行政が国に報告して、国から指定されます。しかし被害が広域過ぎて、その把握が未だにできていないようです。作業に入っても置く場所がないため、ただ泥を集めることしかできず、悲惨な状況が続いています。なお、現状では静岡の復旧は2023年の2月までかかる見込みです。



にありません。なので、今の我々笑顔Pの使命は、現場の復旧はもちろんですが「まさに今、被災地で苦しんでいる人たちがいる」と伝えていくことだと考えております。

また、今回の被災地には豊山派のお寺はありませんでしたが、大規模な災害が豊山派の関係地域で起きた場合は、豊山仏教でも考えておいたほうが良いかもしれません。その時、豊山派の僧侶の手で被災した方々を救済できれば、「豊山ここにあり」という姿を示せるのではないのでしょうか。



## 実際に被災地で感じたこと

白井：私は静岡の直前に被災した新潟の復興支援に参加しました。6名の寺院関係者の方々とボランティアセンターに登録し、すでに被災地に入られていた林さんの現場に近い家屋を修繕いたしました。そうした作業が終わってからは、笑顔P様と共に被災した寺院のお手伝いに参加いたしました。

感じたことの一つは、林さんのチームが重機講習を始めた2019年からたった3年でこれだけ動けるのか、という驚きです。林さんがいなくても誰かが指揮



埼玉二号仏教青年会 東光院 白井宥成

長野仏教青年会 浄光寺 林映寿





を執れる状態があり、人材の育成が着実に進んでいくように感じました。そこで僧侶の方々がもつと絡んでくれば、なおのこと良いのではないのでしょうか。

初めて災害ボランティアに参加したのは、2004年の新潟中越地震後でした。仏青の先輩に声をかけられ、有志として参加しました。津波の被害はなかったのですが、豊山派寺院にも多数の被害があり、本堂の掃除や家屋の片付けを行いました。

災害への意識が大きく変わったきっかけは、やはり2011年の東日本大震災です。この時は直接的な復興活動だけでなく、避難所に差し入れを持って行き、被災された方々と接して話を聞きに行くように仏青の先輩から要請を受けました。避難所に居る

人たちは、もちろん同じ被害を受けた当事者の人達ばかりです。それにまだ被災当初だったため、第三者にしか話せないことがあった

たのではないのでしょうか。我々は僧侶だったため社会的な信頼度が高かったのか、「坊主が何をしに来たんだ」といった警戒はされなかったように思えました。まだ20代の頃だったので、逆にこちらが「頑張つて」と励まされることも多かったです。凄く刺激的な経験でした。

たとえ重機を扱えなくても、被災した現場に一回でも行けば、このような状況がわかるし災害に対する意識が変わると考えています。また、一度行けば寄付をする気持ちも芽生えると思います。「きっと足りないだろうな...」と。

今後台風に限らず、南海トラフや首都直下など、東日本大震災級の巨大地震といった災害は必ず訪れます。その際に動ける若手の方々がもつとあれば尚のこと良い、と感じました。

### 笑顔Pが必要としているもの

林：将来的な後輩の育成に関しては、豊山派の若手がいれば理想的ですが、そうでない人も育っているのではありません。ただ2021年に布施弁天東海寺様で重機講習会を開催して以来、すこ



く頑張ってくれている豊山派の後輩がいることには注目しています。講習会から火が付いたようで、現在では新人を指導できるほどの実力があります。勉強会が良いきっかけになったようです。

また、実は笑顔Pでは、まだ自前の重機を所有しておりません。講習会や被災地復興のために使用している機材はリースによるものです。長期的にリース代を支払うだけでは、時間が過ぎれば結局物理的に何も残りません。また被災地のリース会社にある機材はすぐになくなるので、別の場所(例えば長野)の会社から借りて現地へ運んで行く必要があります。もしも災害が夜中に発生した場合はリース会社の営業開始時間まで待たなければいけません。こうした状況を考慮すると、リース代を支払い続けるよりも、まとまった金額で機材を買った方が良いのではないかと検討しております。

リース代に限らず、活動のためにはガソリン代・宿泊費・資機材のレンタル費用等が常にかかります。昨今は燃料高騰も厳しい状況です。既に豊山仏青様からは支援金(活動資金)を拠出していただいております。特に燃料費がなければ重機は動かさませんので、こうした後方支援に凄く助けられており、誠に感謝申し上げます。

【令和4(2022)年10月20日 中野区慈眼寺にて】

笑顔P様の更なる活動内容詳細につきましては、こちらをご覧ください。



<https://egaonowa.net>